Vol. 107, No.4　May, 2010　　題字　故 一万田 尚登氏

月刊インド

Monthly Journal of the Japan-India Association

財団法人　日　印　協　会　(日印間の政治･経済･文化交流に貢献して 107 年)

2010 年 4 月 30 日
マンモハン・シン首相と会談する直嶋経済産業大臣 及び 北澤防衛大臣
左端は堂道駐印大使

インド政府首相府　ホーム･ページより

目次

1. 日印友好の歴史･写真展 ･･P. 3
2. 石川啄木とインド、そしてタゴール ･･････････････････････････････P. 7
3. インドニュース(4 月)･･P.11
4. イベント紹介 ･･P.17
5. 新刊書紹介 ･･P.18
6. 掲示板 ･･P.19

1. 日印友好の歴史･写真展
Photo Exhibition

去る 3 月 23 日から 31 日まで開催した、『日印友好の歴史･写真展』では、厳選した 54 枚の写真を展示致しました。写真展に来場くださった方もできなかった方も、改めて日印友好に思いを馳せて頂ければと、とりわけ協会と関連の深い 6 枚を選び、ここにご紹介致します。

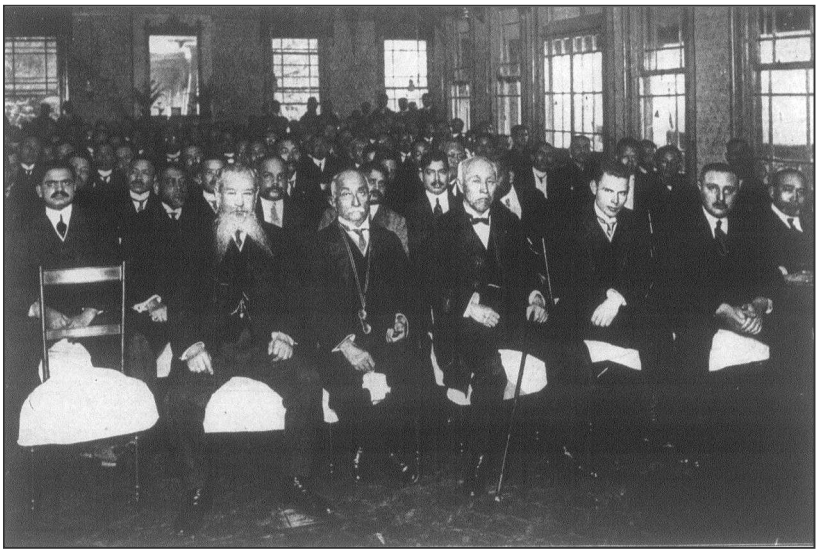
《 日印協会総会（1916 年）》

日印協会は、1906 年に第二代会長となった大隈重信(首相、1898、1914-1916 在任)の下において大きく発展した。1920 年には会員 1,090 名を数え、集会、商工業･学術調査､学校入学･工場実習、身元証明、海外渡航照会など取り扱い､事業件数は 657 件にのぼった。

写真は 1916 年上野精養軒で行われた日印協会総会の様子。

前列右から 4 人目に會頭大隈重信

(『日印協會會報』第 16 号所載)



General Meeting of the Japan-India Association (Year 1916)

The Japan - India Association accelerated its development under Marquis Shigenobu Okuma (Prime Minister : 1898, 1914 - 1916 in service) who became its second president in 1906. In 1920, the number of individual members increased to 1,090 and the number of business activities increased to 657, which included meetings, commerce, industry and academic studies, school entrance, workshop practice, identity proofs, and introduction for overseas passage etc.

Photo: the general meeting of the Japan - India Association at Seiyoken Restaurant in Ueno, in 1916. Marquis Shigenobu Okuma is the fourth from the right in the first row.

(Source: Journal of the Japan-India Association No.16)

《 入京のタゴール翁（1929 年）》

様々な交流の中で日本人にとりわけ強い印象をあたえたのは、アジア人として初めてノーベル文学賞を受賞したラヴィーンドラナート・タゴールであった。タゴールは 5 回にわたって来日し、『東

洋の理想』で「アジアは一つ」と唱えた岡倉天心らと交流を持った。

写真は 1929 年来日時のもの。中央にタゴール、左端に高良とみ。(婦人運動家・のち参議院議員)

(『日印協會會報』第 45 号所載)

Tagore Visiting Tokyo (Year 1929)

Among various people-to-people exchanges between Japan and India, it was Rabindranath Tagore, the first Asian Laureate of Nobel Literature Prize, who made the strongest impression on Japanese people. Tagore visited Japan five times and got in touch with Tenshin Okakura, a famous Japanese thinker and critics. Tenshin Okakura was known for his famous description "Asia is one" in his book 'The Ideals of the East'.

Photo: Tagore in the center and Ms. Tomi Koura (Women's movement activist; later, Member of the House of Councilors) on the very left.

(Source: Journal of the Japan-India Association No.45)

《 自由インド仮政府とインド国民軍 》

日本軍侵攻に対して行われた英領インドでの焦土作戦によってベンガル経済が深刻な打撃を受ける中、日本軍はインド国民軍とともに北東インドへと侵攻した。インド国民軍は、1942 年にモハン・シンの主導でシンガポール守備隊のインド兵捕虜を中核に結成されたが、スバーシュ・チャンドラ・ボース到来と司令官就任によりその兵員は大幅に増強された。

1945 年 8 月の日本の敗戦後、チャンドラ・ボースは日本にかわる新たな支援の場をソ連に求めた。ソ連に赴く途次、台北に於ける航空機事故により死去した。

写真は自由インド仮政府成立 1 周年式典の様子。(『日印協會會報』第 88 号所載)

Provisional Government of Free India and Indian National Army

The Bengali economy was seriously devastated by the "scorched-earth tactics" against Japanese Army's march into British India. Japanese troops made inroads into Northeast India together with the Indian National Army (hereafter, INA). INA was formed in 1942 under the direction of Mohan Singh and was mainly made up of Indian captives in 1942 from the Singapore garrison. INA was considerably reinforced under the leadership of Subhas Chandra Bose as Commander-in-Chief

After the defeat of Japan, C.Bose looked for a new horizon for his struggle in the Soviet Union. On the way,however, he ended his life in Taipei Airport.

Photo: The first anniversary ceremony of the Provisional Government of Free India.

(Source: Journal of the Japan-India Association No.88)

《 日印平和条約の締結（1952 年）》

インドは、イギリスの植民地であったため、第二次大戦中、日本とは戦争状態にあった。戦後の講和の過程で、ネルー首相はサンフランシスコ平和条約が、沖縄の占領など日本に不利な条項を含むとして、これに署名せず、独自の二国間平和条約を日本との間に結んだ。

写真は、1952 年 6 月 9 日、日本の外務省内の条約調印式における K.K.チェットゥール駐日インド大使と岡崎勝男外相。

(提供: 在京インド大使館)

Signing of the Japan-India Treaty of Peace (Year 1952)

Since India was a British colony during the World War II, it was at war against Japan. During the peace restoration process after the war, Prime Minister Nehru did not join the San Francisco Peace Treaty because it contained disadvantageous articles for Japan, such as occupation of Okinawa etc.; instead, he opted to sign a bilateral Treaty of Peace with Japan.

Photo: Signing ceremiony at Gaimusho on June 9th,1952,Tokyo between Mr. K. K. Chettur, Indian Ambassador and Mr. K. Okazaki, Japanese Foreign Minister

(Source: Embassy of India,Tokyo)

《 森首相の訪印（2000 年）》

海部首相の訪印から 10 年後、森喜朗首相が 2000 年 8 月インドを訪れ、ヴァジパイ首相と両国関係の緊密化を目ざす、「21 世紀における日印グローバル・パートナーシップ」を打ち上げた。

森首相の訪印は、1998 年 5 月のインドの核実験で両国関係が停滞して以来、首相としては初めてのものであり、インドとの関係を改善し、深化拡大する上で画期的なものとなった。森首相は、また情報技術(IT)産業の中心地であるインド南部バンガロール市を訪れ、インドの IT 産業への日本の関心の高さを示した。

写真はインド共和国大統領官邸にて。(提供: 内閣総理大臣官邸写真室)

Prime Minister Mori's Visit to India (Year 2000)

Ten years after Prime Minister Kaifu's visit to India, Prime Minister Yoshiro Mori visited

India in August 2000. Prime Minister Mori and Prime Minister A.B.Vajpayee agreed to have the “Global Partnership between Japan and India in the 21st Century” aimed at fostering closer bilateral relations. Prime Minister Mori’s visit was the first prime ministerial visit after the Japan-India relations stagnated in the aftermath of the Indian nuclear tests in May 1998. Prime Minister Mori visited Bangalore, the heartland of information-technology (IT), demonstrating Japan’s keen interests in the Indian IT industry.

Photo: PM. Mr. A. B. Vajpayee (center) and PM. Mr. Yoshiro Mori (right) at India’s Presidential Palace

(Source: Prime Minister’s Cabinet Secretariat)

《 鳩山由紀夫 首相のインド訪問（2009 年）》

鳩山首相は、2009 年 12 月、インドのムンバイとデリーを訪問した。デリーでは、マンモハン・シン首相との間で首脳会談を行い、「日印戦略的グローバル・パートナーシップの新たな段階」と題する共同声明を発出した。

写真は首脳会談の模様。

(提供: 内閣官房内閣広報室)

Prime Minister Yukio Hatoyama’s Visit to India (Year 2009)

Prime Minister Hatoyama visited Mumbai and Delhi in December, 2009.

In Delhi, he had a summit meeting with Prime Minister of India, Dr. Manmohan Singh and issued a joint statement “A New Stage of Japan-India Strategic and Global Partnership”.

Photo : The plenary session of the summit meeting between the two prime ministers”.

(Source: the Prime Minister’s Cabinet Secretariat)

2．石川啄木とインド、そしてタゴール
Two Poets Sharing Ideals in Common

明治大学教授　国際啄木学会副会長
池田 功

26年2ヶ月という短い生涯(1886年～1912年)に、詩集『あこがれ』や歌集『一握の砂』と『悲しき玩具』、また小説や数多くの評論や随筆を残した石川啄木(いしかわ･たくぼく)は、現在日本の高校の国語教科書に掲載されている短歌の数としては第1位を占めるなど、いわゆる国民詩人としての地位にあり、また、英語、ロシア語、ドイツ語、フランス語、スペイン語、フィンランド語などの西欧語や、中国語、韓国語、インドネシア語などのアジアの多くの言語に翻訳されている国際詩人でもある。

1．啄木のインドについての言及

啄木がインドについて言及したことが2度ほどある。最初は小説『葬列』(1906年)の中で、主人公の少年時代の追想として記される。つまり、「生来虚弱で歴史が好きで、作文が得意であつた処から、小ギボンを以て自任して、他日是非印度衰亡史を著はし、それを印度語に訳してかの哀れなる亡国の民に愛国心を起こさしめ、独立軍を挙げさせる」云々である。

主人公はギボンの『ローマ帝国衰亡史』のように『印度衰亡史』を著し、「印度語に訳してかの哀れなる亡国の民に愛国心を起こさしめ、独立軍を挙げさせる」としている。インドは1858年にイギリスの植民地になった。しかしその前年の1857年に、英国東インド会社の傭兵(セポイ)が反乱を起こし、農民も合流して大規模なものになっていたが、1859年に鎮圧された。これがインドの民族独立運動の原点になっている。そういう意味で、愛国心や反乱がなかった訳ではないので、この主人公の認識は正確なものではない。しかし、亡国になった民への憐憫の情を記す中でインドが認識されている点は注目されなければならない。啄木はインドに限らず、ポーランドや朝鮮など植民地になった国々に対しても鋭く反応して文章を記す詩人であった。

次は、随筆「汗に濡れつつ」(1909年)である。「今しがた一人の印度人(インドじん)が通った。大学へ来ている留学生とかで、よく途中で見掛ける男である」云々と、実際にインド人に出会ったことを記している。

2．インドでの啄木の受容

次にインドでの啄木の受容である。インドでの啄木についての本は以下のようになっている。

①ウニタ･サチダナンド、望月善次共編集『石川啄木短歌巻一　スワサニッディア「我を愛する歌」『一握の砂』のヒンディー語訳』(2008年)

②ウニタ･サチダナンド、望月善次共編集『石川啄木短歌巻二　デウアン「煙一煙二『一握の砂』のヒンディー語訳』(2008年)

③ウニタ･サチダナンド、望月善次共編集、書道、後藤加寿恵『石川啄木の短歌：インドの色』(2009年)

④P.A.ジョージ、『一握の砂』のマラヤーラム語訳(現在進行中)

また研究会として、2005年に「インド国際啄木学会」として「あこがれの会」が設立され、さらに2008年11月28･29日と、国際啄木学会インド大会が国際交流ニューデリー日本文化センターで開催された。インドの研究者や詩人･文学者、そして日本の研究者を交えて、数多くの研究発表や講演が行われた。

このように啄木はインドにおいても翻訳され研究もされ始めているのであるが、なぜ啄木は今インドに受容されるのであろうか。それはこれまでの日本における啄木の受容のされ方と基本的

に同じであると思われる。つまり、貧しさ、望郷、病というキーワードである。地方から上京して病に冒されながらも、必死に生きていることを歌ったセンチメンタリズムが、丁度現在のインドにおいても状況がよく似通っているために受容されているのではないであろうか。

しかし、実は啄木の魅力はそのようなものだけにとどまらないのである。啄木の新たな魅力のことを考えると、不思議な程にインドの詩聖タゴール(1861年～1941年)の魅力に類似してくることに気付く。

3．啄木の新たな魅力とタゴールとの共通性

啄木の新たな魅力は、以下のような点にあると私は思っている。それは①自然・環境問題への視点、②教育者としての視点、③反権力の視点、④国際性の視点、そして⑤予言的な資質である。これらを順にタゴールとの共通性という点から簡潔に記してみよう。

①自然・環境問題への視点

文明人が自然に反逆をしてきたということを、啄木は随筆の『一握の砂』(1907年)の「林中の譚(たん)」で、猿が人間を批判する形で示している。「汝等は随所に憎むべき反逆を企てて自然を殺さむとす。自然に反逆するは取りも直さず之れ真と美とに対する奸悪なる殺戮(さつりく)をなす也。(中略)汝等既に祖先を忘れ、自然に背けり。噫(ああ)、人間ほど此世に呪はるべきものはあらじ。」云々である。

また、環境破壊に関しては、小説断片「島田君の書簡」(1909年)で次のように描いている。
「下宿の僕の窓から砲兵工廠(こうしょう)の三本の大煙突が見える。(中略)大煙突の一本が薄い煙を吐き出した。(中略)煙は見る見る濃くなった。大きい真黒な煙の塊が、先を争ふ様に相重なつて、煙突の口の張り裂けむばかりに凄じく出る。(中略)何(いず)れの都会も、有りと有る工場を其中央に集める。幾千百本の煙突を合して唯一本の巨大な煙突を立てる。(中略)そして其都会の中(うち)、其煙の風下に当る区域は、劇しい煙毒の為に生物の健康が害(そこな)はれ、如何なる健康者でも其区域に住んで半年経てば、顔に自ずと血の気が失せて妙に青黒くなり、眼が凹(くぼ)んでドンヨリする。男も女も三十以上の齢は保てなくなる。」云々というものであり、大気汚染の公害を批判しているのである。

一方タゴールである。タゴールは少年の頃、デフォーの小説『ロビンソン・クルーソー』を自然との合一の喜びが描かれた最上の物語として愛読したというが、タゴールは自然の中の一切のものと一つになりたいという憧れがあった。

それ故にこそ、雑草の大切さや新鮮な空気と水の重要性を説き続け、自然破壊、環境破壊は、自らの死を意味するという強い批判をしてゆくのであった。その考えは戯曲「自由の流れ」に描かれている。登場人物の機械とテクノロジーの象徴であるビブディと、自由と生命の象徴であるオビジトとが厳しく対比され、機械が勝利し神になったために、オビジトは生命を投げ出して自由の流れを流そうとするのであった。

このように啄木とタゴールは、共に現在最も重要な国際問題になっている環境問題に対して、人間の自然破壊を批判し機械文明への警鐘を鳴らしていた点で共通するのであった。

②教育者としての視点

啄木は2回にわたって小学校の代用教員を務めた。その教育観は随筆「林中書」(1907年)に記されている。そこでは教育の目的は「人間」を作ることであり、「知識」を授けることは真の教育の一小部分であるとしている。さらに「ああ大きい小児を作る事！これが自分の天職だ」とも記している。つまり、目先の利益にとらわれないすべての基礎になるような大きな人間を作ることを教育の目標にしているのである。

一方タゴールは、40歳の時の1901年に、シャンティニケトンの地に5人の生徒と6人の先生で私立の学校を創立した。これは1921年にタゴール国際大学になっている。タゴールの教育方針は全

人的人格教育であり、自然との調和であり、学問と芸術との融合などを図ることであった。

啄木とタゴールは共に知識偏重の教育ではない、もっと大きな人間を作る人格教育に重きを置き、それに大きな力を込めたという点で共通するのである。

③反権力の視点

日本では1910年に、幸徳秋水らが明治天皇の暗殺を企てたとする大逆事件が起こった。しかし、啄木は大逆事件の被告人の弁護士平出修(ひらいでしゅう)らを通じて、これが権力犯罪、思想弾圧であることを知り、この真実を後世に伝えるために資料を集め記録し始める。また、国内情勢との関わりから「時代閉塞の現状」を書いて、強権政治がもたらす閉塞した時代認識を示した。

さらに同じ年の1910年に日本が韓国を併合し植民地にしたときには、「地図の上朝鮮国に黒々と墨をぬりつつ秋風を聞く」という歌を詠み、哀悼を示した。

一方、タゴールである。1905年10月16日、イギリスは当時先進性を誇っていたベンガルの高揚する民族運動を押さえようとして、単一ベンガル州のベンガル、ビハールとアッサムを2つに分ける分割統治政策を強行した。これに対してタゴールは抗議のために次のような詩を作った。

神よ/ベンガル人の生命を、ベンガルの心を/ベンガルの家々の兄弟姉妹たちすべてを/一つにし給え　一つに。(中略)/かれらが束縛固くなればなれ、/われらが束縛断ち切られん。……(中略)/神のきずなを　お前は切るほど　力があるのか。(『歌詞集』我妻(あづま)和男訳)

ベンガル語で作品を書いていたベンガルの詩人タゴールは、イギリスを「お前」と呼びかけて強く抗議の意志を示した。また、『成功の真の方策』(1905年)では、政府が教科書を英語からベンガル語の4つの方言に分けて翻訳すべきであるという政策に対して、言葉の分裂による分割政策であると批判した。さらに様々な集会で講演をしてベンガル分割に反対したのであった。その運動の高まりに、ついにイギリスは1911年にベンガル分割を取り消すに至ったのであった。

その後もタゴールはガンディーと共にイギリスの植民地主義を批判してゆくことになる。もっともそれはガンディーのような政治的な視点からというよりは、より芸術的で個人主義的な面が強いとも言われている。

④国際性の視点

啄木については拙著『石川啄木　国際性への視座』で記したのであるが、西欧やアジアへの政治的、社会的、そして文化的な深い認識を様々な文章に記している。中国については哥老会(かろうかい)や辛亥革命に強い関心を示し、ポーランドや朝鮮に対してはその亡国に憐憫を示し、さらにドイツのビスマルクやハイネ、フランスのナポレオンなど数多くの人物への言及をしている。

一方タゴールであるが、80年という長命とノーベル文学賞を受賞して国際的な著名人となっており、実に多くの外国旅行を行い、講演を行っている。年譜によれば11回に及ぶアメリカやヨーロッパ、南米や中国、東南アジアへの旅行、さらにこれとは別に5回に及ぶ日本への訪問がある。

このようなタゴールと、26歳で亡くなり一度も外国に行ったことのない啄木を単純に比較することはできないにしても、今日求められている国際性ということが、啄木にも重要な視点としてあったということを指摘することができるのである。

⑤予言する能力

詩人の茨木のり子は「ヨーロッパでは詩人は予言者として尊敬された歴史をもちます」(『詩のこころを読む』)と書いている。そのように啄木もタゴールも、「時代を先どりし予見している作品」や文章を数多く書いている。

啄木の予言に関しては、近藤典彦の『啄木　六の予言』が刊行されているくらい研究がなされている。近藤によれば「ローマ字日記」(1904年)の「新しき都の基礎」の詩から「東京大空襲」を、先ほど記した「島田君の書簡」(1909年)から大気汚染の公害を、さらに1912年1月2日などの日記に記

された市内電車の車掌・運転士のストライキに大正デモクラシーの予言があるとしている。

私はこれらに加えて「日露戦争論(トルストイ)」(1911年)で、「今や日本の海軍は更に日米戦争の為に準備せられている」という文章などに、1941年の第二次世界大戦における真珠湾攻撃を予言した言葉としても考えられると思っている。

タゴールについては、先ほど記した自然破壊や環境破壊、そして機械文明への批判的な予言が指摘されている。さらに我妻和男によれば、タゴールは「植民地主義、超国家主義、戦争主義と機械との結びつきによる大破壊の予感と警告を発し続」け、そのことは「現在の世界の全人類の軍事による、自然破壊による、機構的疎外による危機に最も適合する予言であったことが次第に明らかになってきている」(『人類の知的遺産61　タゴール』)と指摘されている。

以上のように、啄木とタゴールについての類似点を指摘をしてきたが、最後に考えてみたいのは、啄木とタゴールとの詩作品の類似性である。

内容面についてであるが、「あこがれ」という言葉に注目してみたい。『ギーターンジャリ』96番目の作品に「あこがる」という言葉が4回使用されている。

君　世に分(わか)ち与へますところ／そこに　わが心　憧(あくが)る(中略)
涯なき生命を　天(そら)に撒きつつ／そこに　わが心　憧る

次の連でも「そこにわが心憧る」を2回繰り返している。これ以外の16番目にも「君　われを顧みず (中略)ただ　われ　憧憬(あくが)る」という行があるし、また日本訪問中に短詩や警句325編を綴った『迷える小鳥』(藤原定訳)には、「木々は私の窓辺にのぼってくる。もの言えぬ大地のあこがれの声のように。」や、また「木々は大地のあこがれのように、天をのぞこうとして爪立つ。」などに使われている。この憧れは、神への憧憬であり、大地や天への憧れである。

一方啄木であるが、弱冠二十歳で刊行した詩集の題名がまさに『あこがれ』であった。そしてこの詩集の中には、「あこがれ」という言葉がキーワードとして多く使われている。

あこがれ恋ふ子に天(あめ)なる楽を伝ふ／救済(すくい)の　主(あるじ)　よ、沈める鐘の声よ。(「沈める鐘(序詩)」)など。

これらの「あこがれ」は、大人になることや社会に出ることへの「あこがれ」として使用されているばかりではなく、もう少し宗教的な意味での天や光などとの合一への憧れが含まれている。後年の社会性に満ちた啄木しか知らない人には意外に思うかもしれないが、実はこの浪漫主義時代の『あこがれ』は、宗教性と神秘的な憧れに満ちていたのである。

つまり、啄木の初期の浪漫主義時代に作られた、宗教性や神秘性に満ちたあこがれを描いた詩と、タゴールの『ギーターンジャリ』の宗教性や、神への憧憬に満ちた作品群とは類似性が多いということである。

(本稿は、2009年12月14日、日本詩人クラブ主催により在京インド大使館 インディア・カルチュアル・センターで行われた『インドと日本の心に触れる夕べ――タゴールと啄木』における講演要旨である)

◆池田 功(いけだ・いさお)氏 略歴
・1957年新潟県生まれ。
・明治大学大学院博士後期課程修了。
・韓国・東国(ドングック)大学校招聘特別専任講師、
　ドイツ・ボン大学客員研究員などを経る。
・現在明治大学教授。文学博士。国際啄木学会副会長。
・主な単著として、『石川啄木　国際性への視座』おうふう、2006年、
　『石川啄木　その散文と思想』世界思想社<明治大学人文科学研究叢書>、2008年、
　『新版　こころの病の文化史』おうふう、2008年　などがある。

3．インドニュース 4月
News from India

Ⅰ．内政

4月1日

● 英字各紙は、ムンバイ連続テロ事件で唯一逮捕された拘留中のカサブ容疑者に関する公判審議が3月31日に終了し、判決が5月3日に下されることが決定した旨報道。

4月2日

● ヒンドゥー紙は、カルナニディ・タミルナドゥ州首相の第二夫人長男であるアラギリ連邦化学肥料大臣が、与党ドラビダ進歩連盟(DMK)の党首選が実施される場合には、自分も候補者の1人として立候補すると述べた旨報道。

4月8日

● 英字各紙は、4日、西ベンガル州を訪問中のチダンバラム内相は、バングラデシュ、東南アジア諸国、スリランカからの武器密輸ルートとして利用される可能性があるとして、西ベンガル州政府に対し沿岸警備を強化するよう要請。

4月12日

● タミルナドゥ州議会で、与党ドラビダ進歩連盟(DMK)提出の上院復活法案が可決される。

> メモ：
> タミルナドゥ州の上院は、1937年の英領マドラス管区時に設置されたが、1986年のAIADMK政権時に廃止されたもの。1989年に政権を掌握したDMKは上院復活法案を州議会に提出し可決されたものの連邦下院で否決された経緯がある。今回タミルナドゥ州議会で可決された法案が施行されるためには、憲法修正案が連邦両院で可決され、大統領の承認を得る必要がある。現在インドでは6州が二院制を採用している。

4月13日

● インディアン・エクスプレス紙は、「情報権利法」に基づいて公開請求をおこなった結果、2004年5月の第1次統一進歩同盟(UPA)連立政権が発足以降、シン首相とソニア・ガンディー・コングレス党総裁の間で82通の書簡が交わされたことが判明した旨報道。

> メモ：
> 同報道によれば、82通の書簡のうちコングレス党に関するものは1通のみで、シン首相は党務にほとんど関与していないことが分かる由。また、書簡のやりとりから、ASEANとのFTAがもたらす影響を懸念するソニア・ガンディー総裁に対しシン首相が、機会の増大はあらゆるセクターの競争力と収入を向上させるとして説得したことや、ウォルマートのインド参入に関連して、ソニア・ガンディー総裁が小売業における外国直接投資のインパクトに懸念を表明し、シン首相が商工省に検討を指示したことが明らかになっている。

4月14日

● コングレス党は、党創設125周年記念行事の一環として、ウッタル・プラデシュ州で103日間にわたる10の集会・行進活動を開始。

4月15日

● インド宇宙研究機関(ISRO)は、静止衛星打ち上げ用ロケットにおける国産極低温エンジンの飛行試験が失敗した旨発表。

4月17日

● バンガロール市のクリケット競技場で2個の爆弾が爆発し17人が負傷。

4月18日

● タルール外務担当閣外相がシン首相に辞表を提出し、同日中にパティル大統領に受理される。

> メモ：
> タルール閣外相は、親密な関係にあるとされる女性によるクリケット･プロリーグ(IPL)のコチ(ケーララ州)チームの一部所有権取得において公職の立場を利用したとの疑惑が報じられ、政界及びメディアから厳しい批判を受けていたところ、「政府にこれ以降迷惑をかけるのを回避するため」辞任したもの。

4月21日

● 最大野党BJPは、デリー市内で生活必需品の価格高騰に対する政府の対応を批判する大規模な抗議集会を開催。

4月24日

● 英字各紙は、スターリン･タミルナドゥ州副首相が、ホゲナカル上水道整備･フッ素症対策事業について、同事業の取水量は着工前に連邦政府から許可を得ていた容量のみであり、また、プロジェクト･サイトについても、カルナタカ州の領域を侵すことなく、タミルナドゥ州内で実施されているとして、ボマイ･カルナタカ州水資源大臣の主張を全面的に否定した旨報道。

> メモ：
> ホゲナカル上水道整備･フッ素症対策事業について、ボマイ･カルナタカ州水資源大臣は、タミルナドゥ州が当初の計画の17億立法フィートを上回る25億立法フィートの取水を計画しており、また、プロジェクト･サイトの変更によりカルナタカ州の領域で実施されている可能性があるとして、ソーズ連邦水資源大臣に、これらの問題が解決されるまで同事業をタミルナドゥ州に中断させるよう求めていたもの。

4月27日

● ニュー･インディアン･エクスプレス紙は、訓練されたイスラム過激派インディアン･ムジャヒディンのメンバー25 名がアラブ首長国連邦に所在するアジトにかくまわれており、インドに潜入して爆破テロを実行する機会を窺っている旨報道。

4月29日

● 英字各紙は、イスラム過激派インディアン･ムジャヒディンが、コルカタ市においてマーケットやカーリー寺院、空港施設等でテロ攻撃を引き起こす可能性があることから警察が警備体制を強化させた旨報道。

II．経済

4月8日

● 経済問題閣僚委員会は、たばこ製造における海外直接投資(Foreign Direct Investment: FDI)を禁止し、FDI禁止部門リストに加えるとの商工省産業政策促進局からの提案を承認。

4月9日

● 英字各紙は、デリー西部のスクラップ業者で、放射性同位元素による被爆が発生した旨報道。

4月12日

● エコノミック･タイムス紙は、商工省産業政策振興部高官が、マルチブランドの小売業の外資自由化に関し農業省と対話を行っていると述べた旨報道。

> メモ：
> 上記報道によれば、商務省高官は、小売業開放の動きは食料のサプライチェーンのギャップを埋める政府戦略の一環であり、農村からの出荷価格と小売価格の格差を埋める一助となると述べるとともに、小売りへの海外直接投資に対する批判に対処するため、外資比率の上限は農業省との協議の後に決定されるが、おそらく49%になろうとの見通しを示した。

4月20日

- ビジネス・スタンダード紙は、今後インドの中間層の増加に伴い、自動車、組織部門による小売、ヘルスケア、教育、メディア・娯楽の各分野の高成長が期待される部門であるとのマッキンゼー社の報告書の内容を報道。
- インド準備銀行は、「2010－11 年度年間政策声明書」を発出し、政策金利に関し、レポレートは5.25%、リバースレートは3.75%、預金準備率は6.0%に、それぞれ引き上げを行った。

4月22日

- ビジネス・スタンダード紙は、外資系銀行にとって現行規制上では子会社形態での営業を行う利点がなく、支店による運営を好んでいる旨の外資系銀行の声を報道。

4月23日

- フィナンシャル・タイムズ紙は、中央政府は2012年3月までの第11次五カ年計画中に、インフラ投資をGDPの9%に引きあげることを目指している旨報道。

4月26日

- ヒンドゥー紙は、インディラ・ガンディー国際空港のターミナル3は、7月3日に落成式が行われ、7月14日から運用が開始される予定である旨報道。

4月27日

- インディアン・エクスプレス紙は、商工省産業政策振興部が、外資自由化に関する討議文書を作成し5月中旬にパブリック・コメントに付す予定である旨報道。
- 商工省は、中核6部門(原油、石油精製品、石炭、電力、セメント、鉄鋼)の2009年度の成長率は5.5%(前年度は3%)である旨発表。
- フィナンシャル・タイムズ紙は、ナート道路交通大臣が2010年度に50プロジェクトを発注予定であると発言した旨報道。

4月28日

- ビジネス・スタンダード紙は、シーメンス社の車両工場がマハーラーシュトラ州アウランガバードで操業開始の準備ができた旨報道。

4月29日

- フィナンシャル・エクスプレス紙は、クッラ－商務次官が、印の自動車産業が競争力を持つために、関税保護の後ろに隠れずに将来に向けてギアを入れ直す必要があると述べた旨報道。
- ビジネス・ライン紙は、インド政府が安全保障上の観点から中国製通信機器の輸入を禁止した旨報道。

4月30日

- ビジネス・スタンダード紙は、日本たばこ(JT)が、インド政府がたばこセクターにおけるFDIを禁止する数日前に持ち株比率を増加させることなく6,500万ドルをインド子会社に投資した旨報道。

III. 外交

4月1日

- インディアン・エクスプレス紙は、キャンベル米国務次官補(東アジア担当)が訪印し、中国・日本を含むアジアの安全保障に関しインドと協議を行う旨報道。

4月5日

- クリシュナ外相は5日～8日の日程で中国を訪問し、楊外相との会談や、温家宝首相への表敬を実施。外相会談後に、両国首相間のホットライン開設に関する合意への署名を実施。

4月7日

- ヒンドゥスタン・タイムス紙は、中国四川省成都に拠点を持つハッカーがインド政府等のウェブサイトに侵入し、機密情報を含む文書を違法に入手していた旨報道。

4月11日

- 訪米中のシン首相がオバマ米大統領と米印首脳会談を実施。

> メモ：
> オバマ大統領は、核セキュリティー・サミットのために訪米した各国要人の中でシン首相と最初に会談を実施(約50分間)。パキスタン問題やアフガニスタン情勢を中心に意見交換が行われた。

4月12日

- インド外務省は、4月11日～15日の日程で訪印中のサルマン・リヤド州知事がアンサリ副大統領を表敬訪問した旨発表。

> メモ：
> サルマン・リヤド州知事はアブドゥルアズィーズ初代サウジアラビア国王の25番目の息子で、ファハド前国王の実弟。インド外務省が州知事級の人物の訪印に関しプレスリリースを出すことは異例で、インドがサウジアラビアとの関係を重視していることの現れといえる。

- ヒンドゥスタン・タイムス紙は、トルクメニスタン・アフガニスタン・パキスタン・インド(TAPI)を結ぶガスパイプラインに関する閣僚会合が17日にトルクメニスタンの首都アシガバットで開催される旨報道。

4月13日

- シン首相はワシントンで実施された核セキュリティー・サミットに出席。

> メモ：
> シン首相はスピーチの中で、米国の核戦略見直し(NPR)を心強く思うと述べるとともに、印の不拡散の実績は非の打ち所がないことを強調。更に、「原子力エネルギーパートナーシップのためのグローバル・センター」をインドに設立することを提案している。

4月15日

- 英字各紙は、シン首相が、パキスタンが米国に求めている民生用原子力協力に関し、「米パ間で起きていることに自分は干渉するはずがない」と述べた旨報道。
- ブラジリアで第4回IBSA首脳会合(インド、ブラジル、南ア)が開催され、「ブラジリア宣言」が発出される(インドからはシン首相が出席)。

● 米国務省は、スタインバーグ国務副長官が 4 月 20 日～22 日にかけてインド及びバングラデシュを訪問する旨発表。

4 月 16 日

● ブラジリアで第 2 回 BRICs(ブラジル、ロシア、インド、中国)首脳会合が開催され、共同コミュニケが発出される(インドからはシン首相が出席)。

4 月 22 日

● タイムズ・オブ・インディア紙は、パティル大統領が 5 月 26 日から 4 日間の日程で訪中する見込みである旨報道。

4 月 24 日

● ヒンドゥスタン・タイムス紙は、クリシュナ外相が 5 月 14 日～15 日にかけてイランを訪問する旨報道。

4 月 25 日

● パキスタンの英字各紙は、パキスタンがムンバイ事件に関する 6 冊の捜査資料をインドに手交するとともに、インドで訴追されている実行犯カサブとインド人共犯者のアンサリの引き渡しを要請した旨報道。

メモ：
ラホール高裁は、インドで訴追されているカサブの証言はパキスタンにおける裁判では証拠採用できないとの判決を下しており、パキスタン政府は、パキスタンにおける対テロ裁判所におけるムンバイ事件容疑者に対する裁判でカサブとアンサリの証言を記録するために両名のパキスタンへの送還を要請している。

4 月 26 日

● アフガニスタンのカルザイ大統領がインドを公式訪問し、シン首相らと会談。

メモ：
カルザイ大統領は 2009 年の再選以来初の訪印。首脳会談後の記者会見でカルザイ大統領は、近く開催予定の「和平ジルガ」に関しシン首相と協議したことや、カブールで開催予定のロンドン会議のフォローアップ会合にインドからも代表を送るよう要請したこと等を発言。

4 月 27 日

● 英字各紙は、在パキスタン印大使館のグプタ二等書記官が、過去 2 年にわたりパキスタン統合情報部(ISI)に情報を流していたとの容疑でデリーに召還され逮捕された旨報道。

4 月 28 日

● ブータンの首都ティンプーで第 16 回南アジア地域協力連合(South Asian Association for Regional Cooperation: SAARC)首脳会合が開催される(～29 日。インドからシン首相が出席)。

4 月 29 日

● シン首相とギラーニ・パキスタン首相が、SAARC 首脳会合の機会にブータンの首都ティンプーで印パ首脳会談を実施。

メモ：
印パ首脳会談で、シン首相よりギラーニ首相に対し、インドはパキスタンとのあらゆる懸念に関し協議を行い、対話を通じあらゆる問題を解決したいと考えているが、テロの問題が進展を阻んでいる旨伝達。また、同会談で、両首脳は、外相と外務次官が、信頼を回復し、共通の懸念を有するあらゆる議題に関する実質的な対話への道を切り開くためのモダリティーを作成することで合意。シン首相は、外相と外務次官ができるだけ早い時期に会談すべき旨指示した由。

Ⅳ．日印関係

4 月 5 日

- インド日本商工会川村会長は、印商工省シン工業次官に対し、2010 年の対インド政府建議書を提出。

4 月 8 日

- 日･インド経済連携協定(EPA)締結交渉の第 13 回会合が、4 月 8 日から 9 日までデリーで開催される。

4 月 9 日

- 第 7 回日印安全保障対話と第 6 回日印防衛当局間協議が東京で開催される。

4 月 14 日

- 英字各紙は、三菱重工業がグジャラート州のアヌパム社への港湾用クレーンや大型搬送機器の技術供与に合意した旨報道。

4 月 25 日

- 英字各紙は、川崎重工業が、二輪車の輸入及び販売向けの現地法人インディア･カワサキ･モータースの設立を発表した旨報道。

4 月 30 日

- インドを訪問中の北澤防衛大臣がデリーでアントニー国防大臣と会談。
- インドを訪問中の直嶋経済産業大臣は、アルワリア計画委員会副委員長との間で日印エネルギー対話を行うとともに、シャルマ商工大臣と会談。

今月の注目点: クリシュナ外相の訪中

中国はインドにとって最大の隣国であり、国境問題を抱えつつも、近年経済を中心に関係が発展してきており、貿易額は 2002 年から 2007 年間の 5 年間で約８倍に増加、安全保障分野でも、海軍や陸軍が共同演習を行うなど協力を強化している。2009 年は印中間の係争地であるアルナーチャル･プラデシュ州へのシン首相やダライ･ラマによる訪問を中国が非難したり、あるいは、もう 1 つの係争地であるジャンム･カシミール州を巡っては、同州出身者に対する中国政府による査証発給の際に、旅券そのものに貼り付けるのではなく、別紙に発給したものに旅券にホッチキス止めにするなど､両国関係がぎくしゃくした１年であったが､2009 年末の COP15 に向けて印･中はブラジルや南ア等と BASIC を形成するなど、利害が一致するところでは緊密な連携を保っていた。

2010 年は、印中国交樹立 60 周年ということで、クリシュナ外相訪中以外にもパティル大統領の訪中等両国間での要人の往来が予定されている他、また、中国におけるインド･フェスティバル、インドにおける中国フェスティバルが開催されるなど、良好な二国間関係を示す 1 年になると思われる。

4．イベント紹介
Japan-India Events

◆丸の内インドビジネス研修講座

インドの政治･経済･社会、法律･税務･会計･労務管理、更に企業経営上の注意点、リスク管理、日常生活上の留意点などを、体系的かつ具体的に習得できる研修講座です。

日　時: 2010 年 6 月より毎月第 2、第 4 火曜(全 13 回)、各 18 時より 20 時 30 分
会　場: 東京 21c クラブ　コラボレーションスペース
(東京都千代田区丸の内 1-5-1 新丸の内ビルディング 10 階)
対　象: インドに関するビジネスを検討している法人または個人
定　員: 100 名
会費･〆切: 会費･〆切ともに、参加形態によって異なります。主催者にお問い合わせ下さい。
主催者のご好意により日印協会会員は全て 3 割引となります。
(参考価格: 1Day 会員 2 万円 講義 1 回参加権　当協会会員はこれより 3 割引))
主　催: 株式会社サンアンドサンズアドバイザーズ
インドビジネス研修講座事務局(担当 大西)　☎03-3287-7360(平日 10:00～17:30)
FAX:03-3287-7359　　E-mail　info@sunandsands.com
後　援: 財団法人日印協会

インドビジネス研修講座　講義概要

第 1 回　6 月 22 日「プロローグ-インド経済を掌握する鍵」講師: 榎泰邦/山田剛
第 2 回　7 月 7 日「インドの金融」講師: サンジーヴ スィンハ/ムルニ アラム 他
第 3 回　7 月 13 日「インドビジネスに必要な政治知識」講師: 広瀬崇子/ダレル シン
第 4 回　7 月 27 日「緊密化する日本とインドの関係」講師: 猪俣弘司/山田剛
第 5 回　8 月 10 日「進出形態で考える地域別ビジネス情報」講師: 中野正也/入柿秀俊 他
第 6 回　8 月 24 日「税務入門編」講師: 斉藤暢子/スミット タクル
第 7 回　9 月 14 日「財閥とインドのビジネス界について」講師: アフターブ セット
第 8 回　9 月 28 日「インドのインフラストラクチャー開発」講師: 又木毅正/近藤正規
第 9 回　10 月 12 日「インドの消費者市場」講師: アショック スリヴァスタワ/可部繁三郎
第 10 回　10 月 26 日「注目セクター」講師:調整中
第 11 回　11 月 9 日「ビジネス文化と生活」講師: 清好延/笹田勝義
第 12 回　11 月 23 日「法務　入門編」講師: プラモッド クマー ライ 他
第 13 回　12 月 14 日「総括･駐在経験者座談会」講師: 調整中

*都合により講師･テーマの変更等がある場合がございます。あらかじめご了承ください。

◆2010 年度慶應義塾大学東アジア研究所東アジア研究所講座 『南アジアの文化と社会を読み解く』開講中

5 月 12 日(水)より、全 15 回に渡って南アジアに関する講座を行っています。

講座ｽｹｼﾞｭｰﾙ: 水曜日 5 時限(16:30～18:00)開講 (無料)
場　　所: 慶應義塾大学三田キャンパス 西校舎 1 階 517 番教室　東京都港区三田 2-15-45
主催･問合先: 慶應義塾大学東アジア研究所　　FAX: 03-5427-1640
http://www.kieas.keio.ac.jp　　E-mail　kieas@info.keio.ac.jp

第 2 回　5 月 19 日 三尾 稔(国立民族学博物館准教授)　<民衆ヒンドゥー教とは何か>
第 3 回　5 月 26 日 宮本 久義(東洋大学教授)　<インドの聖地と環境問題－聖地バナーラスにおける信仰と生活をめぐって>
第 4 回　6 月 2 日 八木 祐子(宮城学院女子大学教授)　<北インド農村の暮らしを変化>
第 5 回　6 月 9 日 松岡 環(専修大学非常勤講師)　<インド映画の魅力－世界一多い映画を生み出すパワー－ >
第 6 回　6 月 16 日 田中 多佳子(京都教育大学教授)　<インド音楽の世界－楽器に見る人々の「こだわり」－>

◆東インド古典舞踊、アラブ弦楽器、北インド打楽器の共演 ～古の響き～

日　時: 7月25日(日)　開場14:00　　開演14:30(終演予定16:00)
開　場: 山梨甲府 桜座　山梨県甲府市中央1-1-7　☎055-233-2031
主催･問合先: 安延桂珠子インド舞踊スタジオ　☎080-1731-5551
E-mail　studioodissi@nifty.com
チケット: 前売4,000円　当日4,500円
(当協会の方は500円の優待割引　前売3,500円　当日4,000円)
甲府公演のご案内を致しましたが、名古屋でも公演(7/10)があります。

◇上野インドゾウ記念パネル寄付について

先月号でご報告致しましたが、更に3名、1団体から寄付を頂きました。現在の合計金額は35万円となっています。寄付して下さった皆様、ありがとうございます。なお、寄付は引き続き5月末日まで、受け付けております

個人 一口2,000円以上 / 団体･企業 一口5,000円以上
振込先
＊郵便振込　口座番号 00140-1-282682　(財)日印協会 上野動物園インド象記念基金
＊銀行振込　三菱東京UFJ銀行　日本橋中央支店(333) 普通口座0059358　(同上名義)

<寄付して下さった方々(4月2日以降)>
宮下 伸　　雑賀 さだ子　　片桐 紀夫
株式会社小松製作所　　(敬称略　個人･団体別到着順)

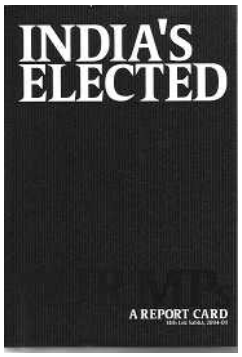
5. 新刊書紹介
Book Review

§『インドで「暮らす、働く、結婚する」』

著　者: 杉本 昭男
発行所: ダイヤモンド社
定　価: 1,400円+税　　ISBN 978-4-478-01286-4　0036

日本にいては経験したくても簡単には出来ないことが、何故かインドに行ったら日常茶飯事、そして時々命懸けだったりする。そんなこんなを乗り越えて、インドで「暮らして、働いて、結婚して、子育てもしている」筆者の軌跡が、ぎゅっとつまった本です。無事日本人に戻れるのだろうか?と自問する筆者にかかると、「インド中毒に蝕まれた(前書きより)」ようにどんな事でも受容可能になり、誰もがインドを受け容れられる様な気がしてきます。

§*INDIA'S ELECTED: OUR MPs, A REPORT CARD,14TH LOK SABHA,2004-09*



Edited by Seema Chishti
New Delhi: The Indian Express Limited (2009)
ISBN: 978-81-908617-0-0

『第14期インド下院議会議員名鑑　2004-09年』 (英文)

第14期下院議員、全543名の、氏名･生年月日、所属政党、学歴、資産･負債、前科、から選挙時の得票数等々、顔写真と共に詳細なデータが掲載されています。

6．掲示板
Notice

<次回の『月刊インド』の発送日>

次回の発送は6月18日(金)を予定しております。6月･7月合併号となりますので催事チラシの封入をお考えの方は、開催日等お考えあわせのうえ事務局までご連絡下さい。

また、チラシを封入する際には、当該催事の協会会員に対する割引等特典の配慮をお願いしております。どうかご検討下さい。

<事務局からのお願い>

協会にE-mailアドレスを連絡されている会員の方には、催事などのお知らせをメールでお届けする場合がございます。携帯のメールをご利用されている場合や、添付ファイルのあるメールを受信しない設定にされている場合は、お知らせが届かない事がございます。E-mailアドレスを連絡してあるのに協会からのお知らせが届いていないという方は、メールの設定をご確認のうえ、利用可能なアドレスを協会までご連絡下さい。迅速な連絡のため、ご理解･ご協力の程お願い申し上げます。

<編集後記>

桜の咲く頃は肌寒くゴールデンウィークになると急に初夏になり、一体何を着たらよいのやら、朝の忙しい時間に長袖か半袖か、上着を脱いだり着たり、時間を取られて慌てて駅まで走って結局汗をかいて電車に飛び乗っています。

40℃を超える熱波におそわれているインドのことを思えば、ちょっと暑いくらいで文句を言っていては罰が当たりそうです。停電問題が解消されれば熱波で死者が出ることも防げるでしょう。インドの電力不足の解決に向けて、また日本の関係各社がそこに商機を見出して、動いていますが、今後に注目したいと思います。

法人会員･個人会員の入会をお待ちします

1903年、大隈重信、澁澤榮一らによって創設された財団法人日印協会は、これまで日印の相互理解と両国の親善増進のために、日々地道な努力を続けてまいりました。ここ数年来の日印の良好な関係をより一層深めるためにも、会員の獲得は重要な課題であると考えています。インドに興味のあるお知り合いの方がいらっしゃいましたら、是非日印協会をアピールして下さい。

ご希望により、当協会の活動に関する諸資料をお送りいたします。

日印協会の活動に賛同して頂ける多くの法人会員･個人会員のご入会をお待ちしております。

☆年会費: 一般個人会員 6,000円/口
学生個人会員 3,000円/口
一般法人会員 100,000円/口
維持法人会員 150,000円/口

☆入会金：一般 2,000円
学生 1,000円
法人 5,000円
(一般法人･維持法人会員共)

本誌に掲載致します投稿等は、執筆者のご見解･ご意見であり、
当協会の見解を反映するものではありませんので、念のため申し添えます。

月刊インド Vol.107 No.4 (2010年5月14日発行) 発行者 平林 博 編集者 青山 鑛一
発行所 財団法人 日印協会
〒103-0025 東京都中央区日本橋茅場町2-1-14 スズコービル2階
Tel: 03-5640-7604 Fax: 03-5640-1576 E-mail: partner@japan-india.com
ホームページ: http://www.japan-india.com/